

古典教室第7回レジメ（8月2日）

『空想から科学へ』第二章

（一）第二章のあらまし

第一章は、「社会主義を科学にするためには、まずそれが実在的な基盤の上にすえられなければならない」であった」という文章で結ばれた。その「実在的な基盤」をつかむには、世界を「科学の目」でとらえる科学的な世界観が必要である。

第二章は、その科学的な世界観の全体を短い文章で説明した章。説明の順序は、弁証法—唯物論—史的唯物論—経済学と、たいへん独特な組み立てである。この流れは、マルクス、エンゲルスの思想的発展の歴史、つまり、科学的社会主義の成立の歴史とほぼ一致している。

（二）エンゲルスとマルクスの思想的発展の歴史

エンゲルス	マルクス
<p>20年11月 誕生。</p> <p>37年 学校を中退。経営人修業の道に。</p> <p>39年 キリスト教との思想的格闘。独学でヘーゲルに到達。</p> <p>41年9月 一年志願兵でベルリンへ。ベルリン大学で聴講。青年ヘーゲル派の面々と親交。</p> <p>〃 後半 フォイエルバッハ「キリスト教の本質」を研究。</p> <p>〃 11月 反ヘーゲル派のシェリングと大学で“論戦”。「シェリングと啓示」など執筆。</p>	<p>18年5月 誕生。</p> <p>35年10月 ボン大学、36年10月ベルリン大学に入学。</p> <p>37年11月 父への手紙。「ヘーゲルを始めから終りまで知るようになった」。</p> <p>41年3月 大学を卒業。</p> <p>〃 4月 ギリシア哲学研究の学位論文。</p> <p>〃 7月 フォイエルバッハ「キリスト教の本質」を研究。</p>

「この頃、M・E 二人とも、熱烈なフォイエルバッハ主義者に。」

42年11月～44年8月 経営者修業で、マンチエスターに。在英中に、「正義者同盟」などの共産主義者や労働者組織、オーエン主義団体などと交流。唯物論的社會観に進み、経済学の研究も始める。

44年1月 『独仏年誌』に「国民経済学批判大綱」を送る。

〃 8月 「パリでエンゲルスとマルクスが会い、意気投合する。『聖家族』を共同執筆。青年ヘーゲル派のバウアー一派への決裂的批判。しかし、フォイエルバッツハへの賛美は続く」。

〃 9月～45年4月 故郷のバルメン地方で活動。

45年4月 バルメンを出て、マルクスのいるブリュッセルに移る。

「ブリュッセルで、『ドイツ・イデオロギー』を共同執筆し、史的唯物論および共産主義革命についての見解を仕上げる」。

44～45年の時期についてのエンゲルスの回想。

エンゲルス「共産主義者同盟の歴史によせて」（85年10月執筆）から。

「私が一八四四年の夏にマルクスをパリに訪ねたとき、理論上のあらゆる分野でわれわれの意見が完全に一致していることが明らかになった。……一八四五年の春にわれわれがブリュッセルで再会した時には、マルクスはもう右の原理を展開して、彼の唯物論的な歴史理論の概要を完成していた。そこで、新しく獲得した見方を種々さまざまな方面で細目にわたって仕上げることに、いまやわれわれはとりかかった」。

42年4月～43年3月 『ライン新聞』を舞台に活動。
43年6月 結婚。

〃 夏 「ヘーゲル法哲学の批判」を書く。

この研究を通じて唯物論的社會観と共産主義の立場に到達。

〃 10月 雑誌『独仏年誌』刊行のため、パリに移る。

44年2月 『独仏年誌』刊行。「ヘーゲル法哲学批判序説」を発表。

〃 6月～8・9月 『経済学・哲学手稿』を執筆。

〃 9月以後 正義者同盟など諸団体との連絡や会合始まる。

45年2月 プロイセン政府の圧力でパリから追放され、ブリュッセルに移る。

(三)「弁証法」部分(段落1～8)

史的唯物論と経済学は、すでに勉強済み。今日はエンゲルスがもつとも力をいれて語っている「弁証法」を中心に話したい。

段落1. 思考形式の二つの流れ。弁証法的思考と形而上学的思考(47～48ページ)

この二つの流れを対置しながら弁証法を説明するのは、ヘーゲルに源流。それをエンゲルスが発展させたもので、マルクスにはないやり方。

段落2. 古代ギリシア哲学の世界観。連関と運動。

その後、形而上学な考え方が優勢になった。その背景には、自然科学の初期の発展状況があった(48～50ページ)。

段落3. 形而上学的な見方のいくつかの特質(50～52ページ)

個々のものにとられてその連関を忘れる。

その存在にとられてその生成と消滅を忘れる。

物事を「媒介のない対立」(硬直した相互対立)で一面的にとらえる。

たとえば、生と死の問題。

段落4～5. 弁証法的な見方の復活。自然科学の発展との関連(52～54ページ)。

段落6～7. ヘーゲルの哲学とその矛盾。(54～56ページ)

観念論から、世界の発展を、観念の発展として説明した。

体系化の要求が、発展の論理を中断させた。

段落8. その弁証法は、唯物論の立場に立つてこそその真価を発揮できる(56～58ページ)。

現代の自然科学の到達点から見ての補足。

たとえば、現代の生命論。

(四)エンゲルスの対比を整理すると――

三つの特徴。

	弁証法的な見方	形而上学的な見方
連関	ものごとを世界の全般的な連関のなかでとらえる。	ものごとを個々ばらばらにとらえる。
変化と運動	すべてを生成と消滅、運動と変化のなかでとらえる。発展、進歩の契機を重視する。	ものごとを、固定した、一度与えられたらそれきり変化しないものとしとらえる。

<p>対立物のとらえ方</p>	<p>対立物を発展の生きた推進力としてとらえる（対立物の闘争と統一、相互移行）。固定した境界線や「不動の対立」を認めない。</p>	<p>ものごとを、白は白、黒は黒といった絶対的な対立のなかでとらえる。</p>
-----------------	---	---

弁証法は、マルクスやエンゲルスが編み出した「法則」を外から自然や社会に押しつけるものではない。たがいに連関しあい不断の変化と運動のなかにある自然や社会を、あるがままにとらえようと思つたら、人間の頭がそれにふさわしい柔軟性、弾力性をもたなければいけない、ということ。

(五) 党活動、革命運動のなかの弁証法

党活動は階級闘争の中心部分。弁証法的な見方が最も必要になる。党活動は弁証法の宝庫。そのいくつかの注意点。

——あらゆる問題を、広い視野の中で見る（連関）。

★世界のなかで日本を見る。「綱領教室」から。

——どんな問題も、歴史の流れの中でとらえる。情勢・状況の変化に注目する。発展の芽・要因・条件を探究する（変化と運動）。

★政治や社会の現状を固定的にみない。変革の立場。

★民主党政権論と日本の政治史。最近のマス・メディアでの対話から。

★ソ連解体後の世界の激動的变化。わが党の積極的対応と全体の政党状況。

——どんな問題も複眼で見る。単眼では、問題の一面面しか見えない。そこには対立する側面も必ずある（対立物のとらえ方）。

★二年前の総選挙の結果をどう見たか。

弁証法の諸法則。

「量的変化と質的变化」。地味な努力の積み重ねなしに飛躍は起こらない。

「否定の否定」。最も否定的な経験のなかにも前進と飛躍へのバネがあり、それを乗り越えた時には、党の質的な発展がある。

★六〇〜七〇年代の両翼の干渉との闘争の今日的意義。

★階級闘争の弁証法。

「対立物の統一と闘争」。

★党の組織。民主と集中の関係。

(六) 第三章の主題

この立場から、資本主義的生産の発展と没落、社会主義社会への変革の必然性を研究し、人間社会の未来展望を明らかにすることが、第三章の主題となる。